

## 長野県東筑摩郡明科町の土地利用

中原 いづみ

明科町は松本盆地北端の、最も標高の低い場所に位置する。そのため松本盆地、北アルプス、筑摩山脈からも河川が流入・合流して町を分断している。また、明科町はフォッサマグナ形成時に由来する数多くの断層と河川の営力により、地形的に特殊な景観をなす。かつ、松本・諏訪新産業都市に接する地でもあり、最近では松本のベッドタウン化する傾向がある。このような状況のもとで、明科町の土地利用には変化が起きつつある。本論ではその動向をとらえ、自然条件・社会条件がどのように影響しているのかを考察しようとした。

まず自然条件・社会条件を検討したところ、明科町という一つの行政単位内でも、地域によって様相が異なることがわかった。そこで同町を性質の似た地区ごとに区分しようと考えた。そして農業集落カードより、1970年と1980年の間の総戸数変化率、総農家数変化率、農家率変化を算出し、それぞれの変化をプラスの変化とマイナスの変化とで区別し、その組み合わせによって分類した。更に農家率や総戸数の規模、増減の実数をも考慮し、明科をA～Jの10区に分けた。その結果、既に市街地として定着し、変化の乏しいA区、宅地化が進むB～D区、宅地化も進むが農家数も多少増えているE区、変化のほとんどないF区、農業へ特化しているG区、近接する過疎地区からの転入のあるH・I区、過疎地区のJ区に分類された。

このような社会条件を指標とするグループ分けに対し、山地と低地とを分け、傾斜地の利用状況と山間地の集落の分布を再確認した。宅地はやはり低地に集中、あるいは増加しつつある。耕地をみると、低地では水利条件の良い地に水田、悪い地に畑が分布し、山地では犀川東岸と西岸とで差異が認められた。東岸では宅地に接する緩傾斜地や、所によっては急傾斜地でも畑作が行われていたが、西岸では下押野の緩傾斜地に耕地が開けているほか、大部分の土地は利用されていない。こ

れは犀川東岸が豊かな黒色泥岩を主成分とし、西岸が礫岩を主成分とする土壌から成ることに対応している。集落も西岸傾斜地にはほとんどないが、東岸には主に道沿いに分布し、より低地へと集まるが、ランダム分布する地区も多いことが確認された。更に各区の特徴を述べ、将来予測を行った。そしてA～J区の配置が自然・社会両条件により必然性を持つことがわかった。

その上で、土地利用の変化が実際に各地形のどの部分に起こっているのかを、最近の変遷の著しい長峰山西山麓について調査した。調査地区はC・D・Eの3区にまたがるが、段丘と扇状地上は一樣に宅地化が進んだ地域である。従って、山麓の扇状地、段丘、天井川堆積地という水の得難い地に限って、昭和47年作製の縮尺3千分の1の地図を用い、この10年間の変化を調査した。この結果、古い集落は段丘崖付近、扇端に列状に立地していたが最近ではランダム分布をなすこと、また10年前には犀川からの電気ポンプ揚水によって段丘より豊かな土壌から成る扇状地全面にわたって開田されていたのに、調査地区北部で揚水を停止し、畑・宅地・休耕地へと一変してしまったことがわかった。それゆえ、この地区の土地利用を左右するのは水にまつわる条件であることがわかった。そして転作や宅地化が進んだのが市街地により近い北部であったこと等、変遷にからむ因果関係を追求し、最終的に、自然条件という恒常的因子が前提として存在し、社会条件という可変的因子の変化によって土地利用が変化する段階から、社会条件自らが社会条件に作用し、それが土地利用に反映していく過程が認められた。このような傾向は偶然この地に認められたものであり、他の地域もこの方向に進みつつあるのか、あるいはこの傾向も一つの「地域性」なのかは未確認である。従って、この点を明科町全域にわたって明らかにしていくことが、今後の課題として残された。